東日本大震災・緊急消防援助隊派遣を終えて

【所　属】　　消防本部警防部

【階　級】　　消防司令

【名　前】　　小嶋　悦喜

今回の震災に際し、緊急消防援助隊大阪府隊第７次派遣隊として平成 23 年 3 月 15 日に被災地に向け出発しました。私自身、大規模災害の応援として被災地に赴くのはこれで 3 度目でしたが、今回の派遣では、活動隊員としての任務と共に、本部警防部員として現地において活動隊の支援という任務も課せられており、今までと違った緊張感が出発時にはありました。第７次派遣隊は、放射線の影響を考慮し、日本海側を北上し新潟県と山形県を経由し岩手県に入るルートを取り、途中、大雪にも見舞われ遠野市の大阪府隊のベースキャンプに到着したのは、16 日の 23 時頃で約 30 時間の道のりでした。第７次派遣隊は 17 日からの活動となり翌朝ベースキャンプを出発し、活動地である大槌町へ向かいました。その途中、遠野市や釜石市内で援助隊の車列が住民の方々の側を通ると、深々と頭を下げられる人や右手を挙げ敬礼をされる方々がおり、その姿を見た瞬間、熱いものがこみ上げると共に、ものすごい勢いで使命感が湧き上がってきました。

釜石市の中心部に入ると風景が一変し、津波で流された車等が見受けられ、改めて津波の恐ろしさを実感し、阪神淡路大震災時の被害状況とは全く違った印象を受けました。

大槌町に到着後、直ちに活動を開始しましたが、直後から要救助者発見の一報が入り、この地域にはまだまだたくさんの人々がいると直感しました。しかし、津波で流されたために正確な人的情報が皆無であり、破壊された建物や車などが積み重なっており、救出活動は大変困難でした。活動を 2 日間続けた夕刻、防波堤の上からフッと海を見たとき「きれいな海やな～」と感じました。これだけの津波被害を起こした海を見て、活動で疲れた気持ちを癒してくれる海を見て、阪神淡路大震災では地震そのものの脅威を感じ、JR 尼崎列車脱線事故では現代社会の脆さを感じ、今回の派遣では自然の恐ろしさと優しさを感じると共に、人間は自然の力には逆らえないということを痛感しました。そして、これからこの様な災害に備えて消防として何をしなければならないかを考えさせられました。

最後に、被災された方々にはこれから更に、厳しい現実が待ち受けていると思いますが、一日も早い復興を心から祈念いたします。